

楊雄說鳥腊也、疑源君引之以方言楊雄所著誤爲方言文也、段玉裁曰、臘、鳥腊也、蓋楊雄蒼頡訓纂中語、按廣韻臘字有三音、平聲十虞音無、十一模音呼、並云無骨腊、上聲九麌音武、云土地臘美臘々然也、則音武非此用、又武二字宜刪、

〔倭名類聚抄十六〕鹿脯魚鳥 說文云、脯音甫、和名乾肉也、禮記云、牛脩鹿脯、脩亦脯、

〔箋注倭名類聚抄四〕鹿脯魚鳥 按保師師之乾肉也、保師之急呼之也、○中釋名、脯搏也、乾燥相搏著也、周禮腊人注、大物解肆乾之、謂之乾肉、薄析曰脯、○中說文、脩、脯也、釋名、脩、縮也、乾燥而縮也、

〔類聚名義抄二〕脯音甫、ホシ、ホシ、トリ、シ、鹿脯ホシ、シ、腊腊居昔、ニ音、

〔東雅飲食〕腊キタヒ二 倭名鈔に唐韻を引て、腊腊は乾肉也、キタヒといひ、又說文を引て、脯は乾肉也、ホジ、といふと注したり、其引用ひし注によれば、共にこれ乾肉なるに、これを呼ぶ事の同じからぬ事不詳、令義解には腊は謂全干物也と見えたれば、是は専ら魚腊の事を釋せしなり、倭名鈔には鳥獸の肉を云ひぬれば全干をいふの義なるべしとも思はず、周禮の疏に、肉脩を釋して、加薑桂、而煅治者謂之脩、不和薑桂以鹽乾之、謂之脯と見えたれば、是は専ら魚腊の事を煅治をいひてカタシといひしは、これを堅くするをいひし也、後にキタヒとも思はず、カタシといふ語の轉じたるなり、腊をキタヒといひしも、其肉を乾して堅からしむるをいふ事、猶漢に煅治などいふ事の如く也しと見えたり、ホジ、とは即乾肉也、内なれば、ホジ、といふものは、火をもて乾せし日に乾したるをば、ヒホシといひ、とは即火也、倭名鈔に注せし所、上に注せし如くなれば、今はた改むべきにもあらず、また倭名鈔に師說を引て、脯の字讀てホシドリといひ、俗に干鳥の字を用ゆと注せり、周禮の注には、薄析曰脯と見えて、其他鳥腊をのみ脯といふべき説も見えず、楊子方言には、鳥腊を臘といふ事は見えたり、

〔庭訓往來〕鹽看者略 中干兔干鹿、

〔令義解三役〕凡調、○中正丁一人、絹繩八尺五寸、○中若輸雜物者、○中雜腊謂全干六斗、○中其調副